



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

# 世界の文学

33

ジード

背徳者  
狭き門  
女の学校  
ロベール

渡辺一民訳  
菅野昭正訳  
佐藤 朔訳

中央公論社

世界の文学 33

©1963

ジード  
モーリアック

訳者 渡辺一民  
菅野昭正  
佐藤 朔  
高橋たか子  
若林 真

Illustrations :  
Copyright by S.P.A.D.E.M., Paris.  
Copyright by A.D.A.G.P., Paris.

昭和38年12月1日初版印刷  
昭和38年12月12日初版発行

価 390 円

発行者 宮本信太郎

本文整版印刷 三晃印刷株式会社  
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社  
口絵印刷 東京プロセス株式会社  
本文用紙 三菱製紙株式会社  
クロス 日本クロス工業株式会社  
製函 加藤製函印刷株式会社  
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地  
電話(561)5921(代)振替東京34

# 背徳者

アンリ・ゲオンにささげる

誠実な友より

われなんじに感謝す、われは畏  
るべく奇しくつくられたり。

詩篇第百三十九篇十四節

年 解  
譜 說

576 556

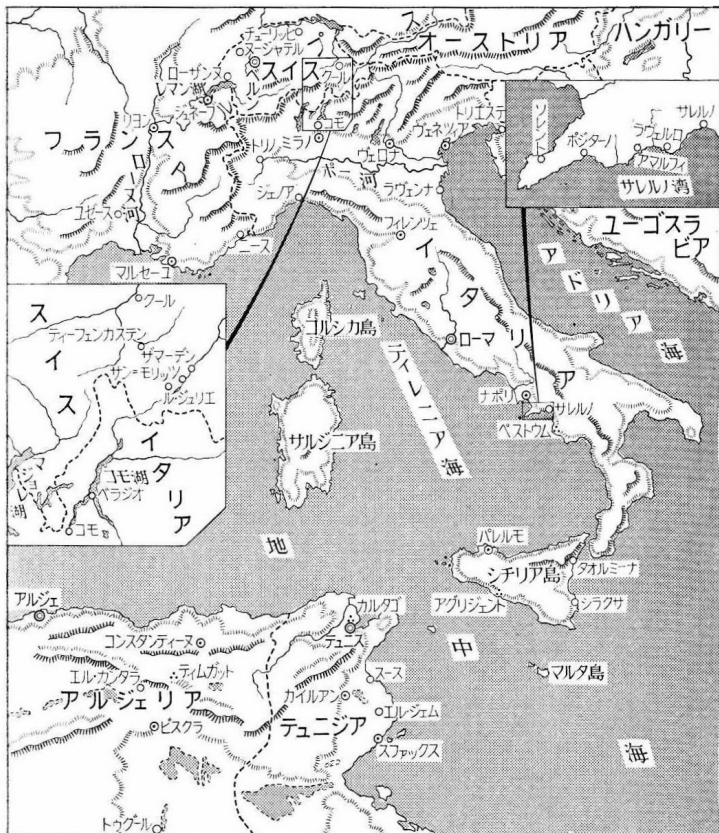
# 背徳者

アンリ・ゲオンにささげる

誠実な友より

われなんじに感謝す、われは畏  
るべく奇しくつくられたり。

詩篇第百三十九篇十四節



## 序

わたしはこの書を、その値するところにしたがいが世に問う。これは苦い灰にみたされた果実なのだ。たとえていえば砂漠のコロシント(中近東原産のうり科の植物)でもあろうか。灼熱の地に生いしげり、渴いた喉をいやがうえにも耐えがたく焼きただれさすものでありながら、黄金色にかがやく砂のうえにあつては、それは美しくないとはいえぬ。

かりに、わたしの主人公を鑑としてしめしたとすれば、わたしはかならずや失敗していたにちがいない。ミシエルの体験に関心をよせてくれたわずかばかりの読者も、その善意を傾けてかれを弾劾するばかりだった。数々の美德をもつてマルスリーヌを飾りたてておいたのも無駄ではなかった。ミシエルがマルスリーヌよりおのれをいとおしんだという事実を、人びとは許そうとはしなかったのである。

といつて、この書をミシエルにたいする告発状としたところで、それ以上の成功をおさめることはまずなかったであろう。わたしの主人公にたいして憤激をおぼえな

がらも、だれひとりそのことについてわたしに感謝するものはいなかったからだ。というより、わたしの意志に反して憤激をおぼえている、とでもいうようだった。怒りはミシエルをこえて、わたし自身にまで及んだのである。もうすこしで、わたしとかれとを人びとは混同するところだった。

ともかく、わたしはこの書物のなかで、告発も弁護もおこなおうとは思わなかった。是非の判断をくだすのはひかえたのである。今日では、ある行為を描いたのちに作者がその態度をあきらかにしないということは、読者のほうで許してはくれない。そればかりではない、劇が展開していく途中でさえも、ひとつの立場を選び、アルセストのがわかフイラントのがわか、ハムレットのがわかオフェリヤのがわか、ファウストのがわかマルガレーテのがわか、アダムのがわかエホバのがわか、去就を決することが望まれているのである。むろん、わたしとして、中立が(ためらいと言おうかとも思つたが)偉大な精神のたしかなあかしたと言いはるつもりはない。だが思うに、おおくの偉大な精神は、しばしば結論をだすことを……嫌つたようである——つまり、たくみに問題を提出するといふことは、あらかじめそれが解決されていることを前提とするものではないのだ。

心ならずもここで「問題」という言葉を使った。ほん



とうのところ、芸術には問題はない——芸術作品がその十分な解決でないような問題など。

「問題」という言葉を「劇的事件」ととられる場合を考へて、いま一言いっておきたい。この書物の物語るものは、主人公の魂そのもののなかで演ぜられるにせよ、かれ個人の体験のうちに限られるには、あまりにも普遍的な意味をもつものにはかならない。わたしは、この「問題」を創りだしたと主張したりはしない。それはわたしの書物以前から存在していたのであり、ミシェルが勝とうが負けようが、これからも存在しつづけるものなのである。だからこそ作者は、勝利をも敗北をも、結論としてしめすことをさしひかえた。

卓越した精神にして、もしこの物語のなかに常ならぬひとりの男についての報告を、この主人公のうちにひとりの病人を認めることしか肯じなかつたとすれば、きわめて切実な普遍の意味をもつ思想が、ともかくもそこに隠されているということを否認したとすれば——その咎は思想にも物語にも帰せられるべきではない。ひとえに作者、さらにいえばその稚拙さが負うべきものなのである——この書物に作者は情熱と涙と想いのすべてを注いだのではあつたが。しかし、作品のまことの意味と一日かぎりの読者のみいだす意味とは、おのずから異なつたものである。興味あるものももちながら最初の日には

まったく興味をひかぬという危険を冒すこと——堪もな  
いことに喝采する明日しれぬ読者を熱狂させるより、そ  
うした危険を選ぶほうがよほど不遜なことだとは、わた  
しは思わない。

要するに、わたしはなにごとくも証明しようとはしなかつた。ただよく描き、その描いたものをあきらかにしようところのみただけなのである。

訳注——『青徳者』は一九〇二年、最初三百部の限定版として出版され、つづいて同年のうちに普及版が出版された。この序文は限定版にはなかつたもので、普及版以後の版に加えられたものである。

内閣総理大臣 D・R 氏へ

シデイ・b・M 一八九一年七月三十日

そうです、兄上のお考えどおりでした。ミシネルはわたしたちに話してくれました。かれのした物語がここにありません。兄上はそれをお望みでした。そしてわたしはそれをお約束いたしました。しかしいざお送りするといふいまになっても、まだわたしはためらっております。読みかえせば読みかえすほど、それは怖ろしいことのように思われてきます。ああ！ 兄上はわたしたちの友人についてどうお考えになるでしょうか？ それよりも、わたし自身どう考えているのでしょうか？ 残忍ともみえる天性も善のほうへ導きうるといふことを否定して、ただかれを見放してしまふべきなのでしょうか？——でも、今日、この物語のなかに、おのれの姿を認めようとするものが一人ならずあるのではないか、そんな気がします。これほどの知性と力を働かせる方法を見つけるわけにはいかないものでしょうか？——それとも、こうしたものには市民権を拒むことができるのもいふのでしょうか？

どうしたらミシネルは、社会に役立つことができるのでしょうか？ 正直なところ、わたしには見当もつきません……かれには仕事が必要です。兄上の勲功によつてもたらされた高い地位、手にしていらっしゃる権力、それをもつてなにか見つけたことはできないでしょうか？——いそいでください。ミシネルは誠実です。いまなおそうです。でもやがて、おのれにしか誠実ではなくなつてしまふでしょう。

わたしは澄みわたつた青空のしたでこれを書いていきます。ドニとダニエルとわたしがここへきて以来十二日というもの、雲ひとつ、日のかげりひとつありません。ミシネルの話では二ヵ月このかた、空は晴れわたつていくということです。

わたしは悲しくも楽しくもありません。ただ、この空気はなにか茫漠とした興奮で人を見たり、悲しみからも楽しみからもひとつとしく隔たつていふような、ある状態を味わわせてくれるのです。これが幸福というものなのではないでしょうか？

わたしたちはミシネルのそばにおります。かれと別れようとは思いません。ここに書いてあることをお読みくだされば、なぜだかわかつていただけるでしょう。そんなわけで、わたしたちも、ここ、かれの住居で兄上のお

返事をお待ちするわけです。遅れないようにしてください。

ご存じのように、学校時代からのかたい友情は年とともに深くなくて、ドニとダニエルとわたしとをミシエルにしっかりと結びつけていたのでした。わたしたち四人のあいだには、契約のようなものが出来ていました。だれか一人が呼んだならば、どのようなことがあっても、他の三人がそれにこたえなければならぬ、というのです。ですから、急をつける謎めいた言葉をミシエルから受けとったとき、わたしはすぐにダニエルとドニに知らせ、三人ともいっさいを投げうって出発したのでした。

みんなミシエルには三年も逢っておりません。かれは結婚し、妻をともなつて旅に出ていましたし、最後にパリに立ち寄ったときも、ドニはギリシアに、ダニエルはロシアに、わたしはご承知のように、病気の父のそばに引きとめられていたのです。といつても、消息がなかったわけではありません。しかし、かれに逢ったというシラスやウィルから聞いた話には、ただただ驚くばかりでした。わたしたちにももう想像もつかないようなある変化が、かれに起こっていたのです。いちいちもつともなだけにかえつてぎこちなかったその立居振舞、わたしたちの放埒な話をいつもひかえさせてしまうほど澄んだその眼差、あのかつての篤学な清教徒の面影はもうなかつ

たのです。それは……でも、かれの物語を説めばわかることです。いそいで申しあげることもありますまい。

わたしはこの物語を、ドニとダニエルとわたしが耳にしたまま、お伝えすることにしたします。ミシエルは露台のうえで話しました。暗がり星の光をあびながら、わたしたちはかれをかこんで横になっておりました。そして物語が終わったとき、目のしたの平野にちょうど日がのぼっていくところでした。ミシエルの家は、ほど遠からぬところにある村とおなじように、平野を見おろしていたのです。この暑さに、作物をすっかり刈りとられた平野は、砂漠のように見えました。

ミシエルの家は、貧弱で風変わりですが趣があります。でも冬には寒さに苦しめられることでしょう。なにしろ窓にはガラスがありません。というより、窓がぜんぜんなくて、壁に大きな穴があいているだけなのです。天気がいいので、わたしたちは戸外に籐をしいて寝ております。

言い忘れましたが、わたしたちは道中つつがなく当地へつきました。到着したときは夕方でしたが、つぎからつぎへと珍しいものに心を奪われ、そのうえ暑さで、もうすっかり疲れきつておりました。途中では、アルジェとコンスタンティーンにちよつと立ち寄っただけです。コンスタンティーンからは、新しい鉄道がシディ・b・

Mまでわたしたちを運んでくれました。でも、シディ・b・Mで待っていたのは一台の荷馬車だったので。道は村のずつと手前でなくなっていました。村はウンブリア地方(イタリア半島中部)の部落にそっくりで、岩山の頂にとまっているような恰好かっこうでした。わたしたちは徒歩で登っていききました。それでもわたしたちの荷物だけは、二頭の騾馬ろばが背負ってくれたのです。この道をとおっていけば、ミシエルの家は村のとつつきにあたります。低い塀をめぐらした庭、というよりは囲い地が家をとります。そこには曲がりくねった三本の柘榴ざくろの木と、すばらしい夾竹桃きょうちくとうがしげっておりました。カビリー人(カビリーは部の山岳地帯。この住民はベルベル族である)の少年がひとりそこにいましたが、わたしたちが近づくと、あわてて塀をのりこえて逃げていききました。

ミシエルは、べつだん喜びの色もあらわさずにわたしたちを迎えました。ひどく素っ気ない態度で、気のゆるむのをひじょうに恐れている様子でした。でも戸口のところまでくると、はじめて厳肅にわたしたち三人を、ひとりずつ接吻きつぶんしてくれたものです。

夜になるまで、わたしたちは十言とこごと言葉をかわしませんでした。客間には、つましいといってもいいような食事しょくじが用意されておりましたが、その部屋の豪華な装飾ざうじやくには、わたしたちは目を見はりました。が、そのわけは、

ミシエルの物語が説明してくれるでしょう。食事がすすむと、ミシエルは自分でコーヒーを沸わかかしてわたしたちにすすめました。それからわたしたちは露台にあがっていったのです。眺めははてしなくひろがり、わたしたちはヨブの三人の友だちのように、火と燃える平野のうえにたちまち落ちる日ひにみとれながら、待っていました。

夜になって、ミシエルは話しはじめました。

\* 訳注——サタンによつてさまざまな災厄をもたらされたヨブは、信仰を失うことなくそれに耐えたが、そのとき三人の友がヨブを訪れ、七日七夜かれとともに地に坐してかれを慰めたという。ヨブ記第二章十一節参照。

## 第一部

### 一

ぼくはきみたちの誠実さを信じていた。ぼくの招きに、きみたちはかけつけてきてくれた。ちょうど、きみたちの招きにぼくがかけてつたであらうようにね。ともかく三年このかた、きみたちはぼくに逢<sup>あ</sup>つていなかった。それほどの別離にもかわることのなかつたきみたちの友情だ、これからきみたちに話そうとする物語を聞いても、やはりかわることがないと思いたい。とつぜんきみたちを呼びよせ、しかもこんな遠国の住居<sup>すまい</sup>にまで旅させたというのも、ただきみたちに逢い、きみたちに話を聞いてもらいたいためなのだ。きみたちに話すというのと以外の救いを、ぼくは望まない。なぜなら、ぼくはもうこれ以上さきへいくことのできない、人生の一点にまで到達してしまつたからだ。といつても、精根<sup>せいこん</sup>つきはたというのではない。実際のところ、ぼくにはもうわからない。でも、そうせずにはいられないのだ……なんど

も言うように、話さずには。おのれを自由にするすべなどなんでもない、むずかしいのは、自由の道を知ることだ——自分のことを話すのをゆるしてくれたまえ。謙遜も自負もなく率直に、自分自身に語るよりもっと率直に、ぼくのこれまでの生活をきみたちに話したいと思う。聞いてくれたまえ。

ぼくたちが最後に逢<sup>あ</sup>つたのは、いまでもよく覚えていられるけれど、アンジエ(フランス西部、アンジ)からほど遠からぬ田舎<sup>いなか</sup>の小さな教会で、ぼくの結婚式のときだったね。参列者はすくなかつた。でも、すぐれた友人たちがぎてくれたので、この月並みな儀式も感銘ふかいものとなつた。みんな感動しているようにぼくには思えた。そう思つただけで、ぼく自身感動してしまつた。教会を出てから妻となつた人の家で、笑い声もどよめきも聞こえない、ささやかな宴席<sup>えんぎ</sup>がもうけられた。そこでぼくたちはきみたちと落ちあうことができたのだったね。それから、恒例の用意の馬車がぼくたちを連れさつた。ぼくたちの心のなかでは、結婚という観念は、どうしても出発のプラントホームの影像と結びついてしまつたらしい。

ぼくは妻についてほとんど知ることがなかつた。彼女のほうでも、それ以上にぼくのことを知っているとは思えなかつた。でもぼくは、べつだんそのことを苦にした

りはしなかつた。彼女とは愛情もなく結婚した。というより、死の床とこにあつて、ぼくをひとり残していくことに心を痛めていた父を、すこしでも喜ばそうというのが本心だつた。ぼくは父をほんとうに愛していたのだ。父の最期の苦しみくるしみに心を奪われていたぼくは、この悲しみのときに際して、ただもう父の最期を楽なものにしてやりたいとのみ念じていた。こうしてぼくは、人生とはどんなものかも知らずに、人生の第一歩を踏みだしたわけだ。婚約は死にゆくものの枕辺まくらべで、笑い声ひとつなく取りおこなわれた。といっても、厳肅な喜びがなかつたわけではない。父の得た安心は大きかつた。ぼくは婚約者を愛していなかつたといつたけれど、他の女をかつて愛したこともなかつた。そのことだけで、ぼくの目には、ぼくらの幸福を保証するのに十分だと思えた。それに自分自身のことにも無知だつたので、ぼくのすべてを彼女に捧げていると思ひこんでいたのだ。彼女もまた孤児で、二人の兄弟と一緒に暮らしていた。彼女マルスリーヌは二十にじゅうになつたばかりだつた。ぼくは彼女より四つ年上だつた。

まったく愛していなかつたといつても、それは彼女にたいして、ともかく普通いわれている愛情のようなものはなにも感じなかつたということだ。しかし、愛情という言葉がしたしみやいづくしみ、さらにすくなからぬ敬

意といつたものを意味するとすれば、ぼくは彼女を愛していたとも言える。彼女はカトリックで、ぼくはプロテスタントだつた……でもぼくのほうでは、自分がプロテスタントだと思つたことはほとんどない！ 結婚に際して、カトリックの司祭はそのことを大目に見てくれたし、ぼくのほうも、司祭のままで式をあげることに異議をとらななかつた。だから式は、なんの不都合もなく取りおこなわれた。

父は、世にいうところの「無神論者」だつた——すくなくともぼくはそう思つている。父にも一種うちがちがたい羞はづかじらいがあつたのだらう、いちどもぼくと信仰について話したことはなかつたけれども。母のきびしい新教徒としての教えは、母の美しい面影とともに、ぼくの心のなかでしだいに薄れていつた。母がはやく亡なつたことはきみたちも知つてゐるだらう。こうした子供のころの最初の教訓が、どれほどぼくたちを左右するものか、どんな變おとなをぼくたちの心に残していくものか、当時のぼくは想像もできなかつた。しかし母に教えこまれた厳格さを尊ぶ心は、やがてぼくの趣味となり、そつくりそのままぼくの研究にもちこまれることとなる。母をうしなつたのは十五の年だつたが、それからというものの、父はぼくにかかりきりで世話をやき、ぼくの教育にはとても熱心だつた。その時分にはもうラテン語とギリシア

語はそうとう知っていたが、あらたに父について、ヘブライ語とサンスクリット、さらにペルシア語とアラビア語まで、すぐに覚えこんでしまった。そんなわけで二十になるころには、ぼくのほうでもすっかり夢中になって、自分の仕事を手伝えようと父に思いたたせるほどだった。ぼくを仲間扱いするのが父にはたまらなく嬉しかったとみえて、やがてぼくの力のほどをぼくにみせてやろうと考へだした。父の名前で発表された『ブリュギア人の祭祀について』(ブリュギアは、紀元前六世紀ころまで、エーゲ海音楽などを)という論文は、じつはぼくの書いたものだ。父はほとんど手を加えなかった。ところが、これがまたこれまでになかったほどの讃辭をうけたのだ。父は有頂天になった。ぼくはといえば、ぺてんがまんまと成功したのでかえって当惑してしまった。でもそれからは、ぼくも世に認められるようになったわけだ。一流の学者がぼくを同僚として扱ってくれる。いま考へてみると、そのころぼくのうけた名誉など、まったく馬鹿馬鹿しいもののような気がするが……こんなふうに、廃墟と書物のほかはほとんどなにも目にしないで、人生についてはなにひとつ知ることもなく、ぼくは二十五歳になった。異常な情熱を仕事のうちに濫費していったのだ。ぼくは数人の友人を愛していた(そのなかにきみたちもいた)。でも、友人というよりはむしろ友情を愛していたのだ。ぼ

くの友人への献身ぶりは目立たずにはいかなかったが、じつは自分に高潔さが必要だったからにすぎない。ぼくは自分のなかの美しい感情を、ひとつひとついつくしんでいたわけだ。要するに、ぼくは自分自身について無知だったように、友人のこともなにひとつ知りはずなかつた。自分にはべつの生活を選ぶこともできたのだし、またいまでも違ったように生活できるのだというような考へは、一瞬といえども、頭にうかぶことはなかった。

父とぼくは、ごく質素なものでこと足りた。二人とも、ほとんどお金を使うことがなかったから、二十五になつても、まだ家が金持であるのを知らなかった。そんなこととは思ひもかけず、ただ家には食うに必要なものしかないというふうに、よく想像していたものだ。しかも、父と一緒にいてすっかり節約の癖がついていたので、家にははるかにたくさん財産があると知ったときには、ほとんど気づまりな思いをしたほどだった。なにしろこういうことにかけてはまったく迂闊なのだろう、ともかく自分の財産についていくぶんかはつきりした觀念ももてたのは、ぼくが唯一の相続人である父の死の直後できえもなく、じつに、夫婦財産契約をかわしたときのことだった。マルスリーヌがほとんどなにも持っていないということを知ったのも、そのときのことだ。

それまでまったく知らなかったことで、もうひとつ、

おそらくもつと大事なことがある。ぼくの体がきわめて弱いということだ。でも、ためしてもみないで、どうしてそんなことがわかるものか？　ときどき風邪をひいたりしてはいたけれども、いつもいい加減に放っておいた。ぼくの送っていたあまりにも平穩な生活が、ぼくを弱らせるとともに、ぼくの健康をまもっていてもくれたのだ。ぼくとは逆に、マルスリーヌはいかにも丈夫そうだった——じじつぼくより丈夫だったということが、まもなくきみたちにもわかるだろう。

結婚式の夜、ぼくたちは二部屋ばかり取っておかせたパリのアパートマンに泊まった。パリにいたのは、必要な買物をするあいだけ、それからマルセーユへいき、そこからさらに船にのってすぐテュニスへ出発した。せわしない心づかい、目くるめくように早足ですぎさせた最近の出来事の数かず、ひとときわ身にこたえる喪の悲しみのすぐあとにきた結婚のまぬがれがたい感動、そうしたものすべてのためにぼくは疲れきっていた。といっても、船にのってはじめに疲労を感じる事ができたのではあるが。それまでは、疲労を加えていくひとつひとつの用事が、かえって気をまぎらせてくれた。船のうえて無聊を余儀なくされて、やっとかえりみる事ができるようになったのだ。そんなことはこれが最初だ

つたと思う。

そればかりではない、ぼくははじめてながいあいだ仕事から遠ざかることを承知したのだ。これまでは自分にたいして、みじかい休暇しか許そうとはしなかった。もっとも、母の死の直後、父に同行したスペイン旅行は一月以上つづいたし、ドイツへの旅は六週間もなかった。ほかにもまだある——しかしいつも調査旅行だった。父はひじょうに綿密なその研究から、旅行中でも気をそらすことはなかったし、ぼくにしたところで、父についていく必要がなくなるとすぐに、本を読みはじめの始末だった。ともかく、マルセーユをはなれるとすぐに、グラナダやセビリアのさまざまな思い出、ひとときわ澄みわたった空、くつきりとした影、お祭り、にぎやかな笑い声、歌声などがよみがえってくるのだった。もういちど見つけたさうとしているものはこれなのだ、そんな気がした。ぼくは甲板に上がっていつて、マルセーユが遠ざかっていくのを眺めた。

急に、マルスリーヌをしばらく放っておいたことに気がついた。

彼女は船首にすわっていた。ぼくは近づいていった。正直なところ、そのときはじめて彼女を見つめたのだ。

マルスリーヌはとても綺麗だった。きみたちも知っているだろう、逢ったことがあるのだから。これまでそれ



に気がつかなかったことを、ぼくは心に咎めた。もつとも、こと新しく彼女を眺めるには、彼女をあまりにも知りすぎていたのも事実だ。両方の家族はしょっちゅう往き来していたし、ぼくは彼女が大きくなるのをずっと見てきたし、そんなわけで彼女の魅力にはつい慣れっこになつていたのだ……はじめてぼくは驚いた。それほど彼女の魅力はすばらしいものに見えた。

黒い簡単な麦藁帽子のうえに、彼女は大きなヴェールを風になびかせていた。金髪だったが、華奢には見えなかった。対のスカートと上着は粗織りの派手なスコッチ地で、ぼくらが一緒に選んだものだった。喪のために彼女が陰気な服装をするのを、ぼくが好まなかったからだ。ぼくに見つめられているのを感じたのだから、彼女はふりかえつた……それまでのぼくは、彼女のそばにいても、うわべだけの熱意をみせているにすぎなかった。愛情のかわりに冷ややかな愛想のよさで、どうにか取りつくるつてきたのだった。そうしたものを、彼女がすこしばかりうるさがっていることも知っていた。そのときマルスリーヌは、ぼくがはじめてべつの目で彼女を見つめているのに気がついたのだろうか？ 彼女のほうでも、ぼくをじっと見つめた。それからやさしくにっこりとほほえんだ。一言も言わずに、ぼくは彼女のかたわらに腰をおろした。ぼくはそれまで、自分のために、すくなく

とも自分の思いどおりに生活してきた。結婚はしたけれども、妻のなかに友人以上のものを想像してみたことはなかったし、だいいち結婚によって生活がかわるかもしれないなどは、思つてみたこともなかったのだ。やつとぼくには、独白がこれでおしまいになつたということがわかりだした。

甲板にはぼくたち二人だけだった。彼女はぼくのほうに顔をさしだした。ぼくはそつと彼女をひきよせた。彼女は目をあげた。その臉のうえにぼくは接吻した。すると、その接吻のおかげで、ふいに、いつくしみとでもいおうか、一種あらたな想いがこみあげてきた。心はたちまち彼女でいっぱいになって、そのあまりの激しさに、もう涙を抑えることができなかつた。

「どうなさつたの？」とマルスリーヌが言った。

ぼくたちは話をはじめた。彼女の言葉の魅力に、ぼくはうっとりとなつた。ぼくはぼくなり、女の愚かしさについて、これまで多少考えるところもあつた。でもその夜、彼女のそばにいて、不器用で間抜けに見えたのは、じつにぼくのほうだった。

たしかに、ぼくが生を結びつけたこの女は、彼女自身のまぎれもない生をもつていたのだ！ この考えに心をすつかり奪われて、その晩、なんども目がさめた。そのたびに、なんども寝台のうえに起きあがっては、下の